

「周囲に『もう復活できないんすかね?』と聞いていたそうです。いまだに事の重大性が分かっていない」と『週刊文春』2月25日号で、「状況認識・判断能力」の欠落振りを呆れられてしまったのは元衆議院議員の宮崎謙介氏。

同誌3月24日号で学歴詐称、経歴詐称を報じられたシヨーン・マクアードル川上もとい川上伸一郎氏も、「復帰に向けての充電期間ですから」と周囲に語る。泰然自若、振りが失笑を買っています。

「経営コンサルタ
ント」と並んで如何

様にも御託宣可能な「心理カウンセラー」に詳しい診断はお任せするとして、実に傍観者のな一連の発言と行動に僕が違和感を抱き続けているのが「ゲスの極み乙女。」の川谷絵音もとい川谷健太氏。

ベッキーもといレベッカ・英里・レイボーン嬢との「交際」を、新年7日に発売された『週刊文春』1月14日号から2月4日号まで4号連続で報じられた彼は、意外や意外、同誌3月17日号、3月24日

連載

第20回

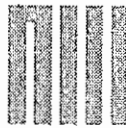
さやかだけど、 たしかなこと。

田中康夫

You are the Hope for Tomorrow.

「低温動物」化する若者たち 「ゲスな不倫」に見る「社会性」の欠如

レイアウト——宗利淳——デザイン



号で2週連続の単独インタビューに登場。「ゲス川谷が本誌に独占激白」と題しての初回の記事の前半には、3月2日に渋谷のライブハウスで「言い放った」複数数の発言が紹介されています。

「言っておくけど、オレ、好きで黙ってたわけじゃないから!」

「ネットとかでみんな『謝れ』って言うけど世間の誰に謝ればいいの? 正直、内輪での話だからみんな関係ないじゃん」

「ほらオレ、失言とかメッチャしちゃうからさ(笑)。たぶん今日のことメッチャ書かれると思うんだけどなんかもう何言われてもいいかなって」

後半の「独占激白」で、「まだご結婚生活は続いているんですか」との質問に、「えーっと、もう別居中ですね、ずっと」と答えた彼は、ベッキーもといレベッカ・英里・レイボーン嬢に対しての想いを問われた翌号の「懺悔告白第2弾」では、「僕からは何とも言えないですね。僕も先のこととは

分らないというか。はい」「僕の気持ちをも、勝手にしゃべるとよくないかなと思つて。はい」と居直るのです。

32歳の誕生日を3月6日に迎えた「乙女」改め「大人」が、耳目を集めた「不倫騒動」の相手。両者の「自己責任」に基づく身から出た錯だつたとは言え、その一方の当事者にも拘らず、彼の発言は他人行儀そのもの。

ふと僕は、SNSにネット上で頻繁に目にする常套句「……ですけど、何か？」を想起しました。元々はお笑いコンビ「おぎやはぎ」の持ちネタとして産声を上げ、2007年のTVドラマ「ハケンの品格」で市民権を得た言い回し。謂わば最近の日本語です。

SNSとはソーシャル・ネットワークキング・サーヴィスの略号。国境や言語の壁を越えて世界中と繋がるインターネット上の交流を通じて社会的ネットワークを構築するサーヴィスです。が、皮肉にも、冒頭で言及した「状況認識・判断能力」という「社会性」が抜け落ちた時空へと陥る傾向にあり

ます。

自分が勤務するコンビニエンスストアの冷蔵庫に入つてピースサインで悦に入る写真をツイッターやインスタグラム、フェイスブック等のSNSに投稿し、炎上する事例は枚挙に遑がありません。それは、自分と世界の間が存在している苦の社会という「世間」に対する想像力が欠落しているが故の行為。「こんなに騒がれるとは思わなかつた」と炎上後にSNSで発信される釈明が物語ります。

世話好きオバサン
だつたり頑固ジイサン
ンだつたり、向こう三軒両隣に象徴される「周囲の目」という「世間」が、嘗ては機能していました。一歩間違えれば、弁証法に基づいた助言・諫言・提言を「異論」として排除する、大政翼賛会に連なる同調圧力へと変容する危険性も孕みます。が、こつした「世間」が、ここまですら許される。ここからは許されない。というサーモスタットII状況認識・判断能力を養つてくれたのです。



「内輪での話だからみんな関係ないじゃん」と、「ゲスな宇宙旅行」と銘打つて全国15公演を展開する現時点でも記者会見は疎か、囲み取材、すら受け付けぬ一方、昨年来の執拗な取材攻勢の中で逆に気心が知れたと思しき「週刊文春」では、吐露しています。

「最初は遊びで始めたんですけど、今ではみんな人生そのものっていうバンドになっていた」と。御同慶の至り。が、「作詞作曲の他、MV（ミュージックビデオ）のコンセプトや雰囲気、バンド名、メンバーの名前（ドラムス「ほな・いこか」、キーボード「ちゃんMARIE」、ベース「休日課長」）もすべて川谷が決めた」と同誌が伝える東京農工大学工学部応用分子化学科卒業の彼の拘りは、ICTIIインフォメーション&コミュニケーション・テクノロジーの高度消費社会だからこそ、より華やかに開花したとも言えるのです。「ツイッターとかで文面出したところでもまた何か言われるし、伝わ

らないじゃないですか。こうやってツアーとかでファンの皆さんに直接伝えられればなつて思うんで……ゲス（のメンバーは）めつちや仲いいしこれからもゲスの極み乙女。には変わりないんで」

「奥さん以外の方を実家に連れて行ったことに最も批判が集まった」と「週刊文春」が断じた彼が率いるワンマンツアーは、その実家が所在する長崎県で5月8日、千秋楽を迎えます。

仮に傍観者の発言に終始しようとも、会見を一度設ければメディアの追っ掛けも終息するでありましょう。なのに、敢えて単独インタビューに留め、面子を潰された他媒体の面々は切歯扼腕どころか激昂。都合3ヶ月も炎上状態を維持し続けているのは実は、「ゲスな宇宙旅行」プロモーションの一端かと勘繰られています。

読者諸姉諸兄の周囲にも棲息しているであろう、忠言しても嫌に釘なKY人間。定温動物改め「低温動物」な言動を繰り返す川谷氏も、お花畑な自分LOVEが身上的の芸術家なのでしょう。

たなか・やすお……1956年生まれ。作家。2000年から06年まで長野県知事を務める。

近著に「33年後のなんとなく、クリスタル」など

田中康夫ダイレクトメール→tanaka@nippon-dream.com URL→http://www.nippon-dream.com/